

# イラン、ボラギ渓谷考古学緊急調査シンポジウム

常木 晃

Symposium on the Archaeological Rescue Excavations in the Bolaghi Valley

Akira TSUNEKI

キーワード：イラン、ファルス州、シヴァンド川、ボラギ渓谷、緊急調査

Key-words: Iran, Fars, the Sivand River, the Bolaghi Valley, rescue excavations

イラン政府は現在、ファルス地方ザグロス山脈中のボラギ渓谷 (Bolaghi Valley) にシヴァンド川 (Sivand River) ダムを建設している (図1)。ボラギ渓谷は、アケメネス朝ペルシアの王都であったパサルガダエ (Pasargadae) とペルセポリス (Persepolis) とを結ぶ途上であり、パサルガダエ側のモルガブ平野 (Morghab Plain) から入った細い渓谷とそれに続く 10 km × 3 km ほどの盆地で構成されている。シヴァンド川が盆地から南流する出口部分にダムが建設されつつあり、その完成に伴って渓谷の大半が水没してしまう。そのため、イラン政府文化遺産観光庁 (ICHTO) 考古学調査センター (ICAR) は 2004 年秋に、渓谷内を外国の調査隊に開放し、水没する遺跡の緊急調査への参加を呼びかけた。この呼びかけに応じて、2005 年 2

月より、ICAR とポーランド、ドイツ、フランス、イタリア、アメリカ、そして日本の各国の共同調査隊が次々とボラギ渓谷に入り、さまざまな時期の遺跡調査をおこない、その調査は現在も断続的に継続されている。この各国隊の調査成果を披露しあい、ボラギ渓谷の歴史的な意味を考えようというシンポジウムが、ICAR の主催で 2006 年 2 月 23 日～24 日の日程でファルスの州都シラズ (Shiraz) で開催された。

シンポジウムは、「ボラギ渓谷考古学緊急調査シンポジウム Symposium on the Archaeological Rescue Excavations in the Bolaghi Valley」と題され、ICHTO、ICAR、ファルス州などの行政当局者らと、イラン各州の文化財局長や大学などの考古学関係者、アメリカ隊を除く

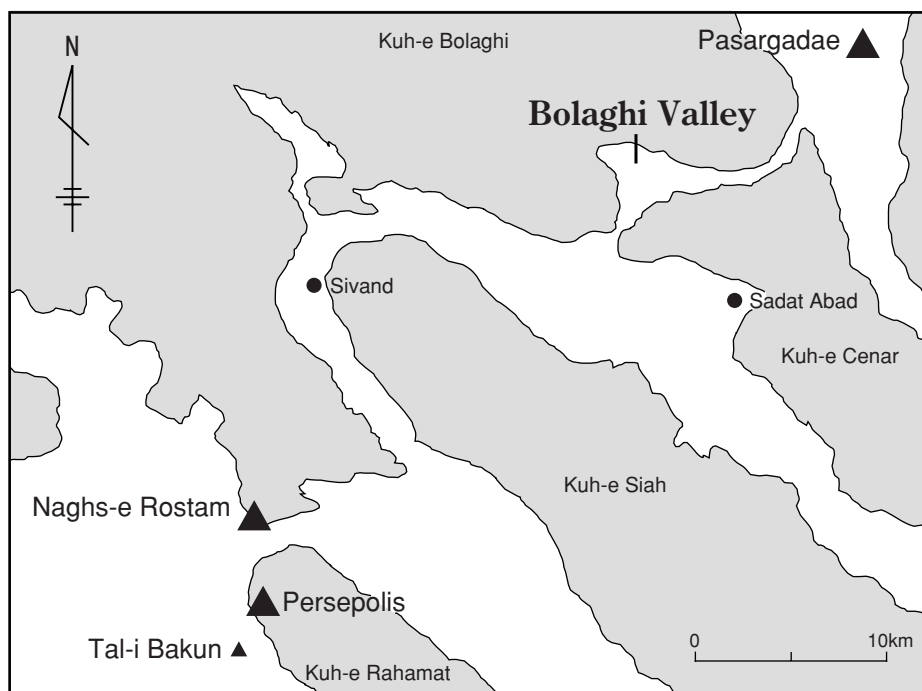


図1 ボラギ渓谷の位置

5 隊の各国調査隊関係者ら、200 名ほどの専門家が参集した。日本からはイラン＝日本共同調査隊のメンバーである筆者と、同じファルス州のアルゼンジャン地区で考古学調査を計画している筑波大学の西田正規教授の2名が招待されて参加した。シンポジウムの成果について、簡単に紹介していこう。

シンポジウム初日の2月23日は、朝8時よりオープニングセッションが始まった。まずイラン国歌、それについてコラーンの一部と古詩が朗読され、さらに3人の行政当局者らの演説が続いた。筆者には特に3人目のICHTO副長官タハ・ハッケミー (Taha Hashemi) 氏の登場が印象深かった。氏はイスラームの高僧であり、まず風貌からして中世の人のような威厳に満ちている。話は考古学や文化財のことにはほとんど触れず、イラクでのアメリカ軍の傍若無人な振る舞いとテロの話に終始した。このシンポジウムは大丈夫なのかという不安が一気に高まる。

午前10時30分より第1セッションが開始された。まず登場したのがICARのモハンマド・アタイ (Mohammad Atai) 氏であり、ボラギ渓谷の遺跡の概要について30分のレクチャーが行われた。氏は非常に若く、自分の修士論文のためにボラギ渓谷で遺跡踏査を行っていて、ボラギ渓谷で最初の(そしておそらく最後の)遺跡地図を作成した。彼のつけた盆地内の遺跡番号 (BV1～BV129、後にBVの略号はTBに変えられた) が、今回のプロジェクトにかかわる全ての調査隊の共通遺跡番号として採用されている(図2)。彼自身の発表では、特にアケメネス朝ペルシア期

の遺跡、なかでもいわゆる「王の道」に格別の関心を抱いている様子が分かった。小型のカイトを利用した渓谷内の遺跡の写真撮影やコンピュータ技術を駆使したプレゼンテーションなどに、その自負と意欲が現れていた。

午前11時より12時までの1時間は、イラン＝日本隊の調査成果発表に与えられた。まずイラン側の共同調査隊長であるモフセン・ゼイディ (Mohsen Zeidi) 氏が、パワーポイントを用いて調査概要を説明した。発掘調査を行った渓谷中央北部のBV75とBV130(新規番号)の洞窟遺跡でプロト新石器時代と想定される文化層が発見されたこと、その文化層が細石刃主体の石器インダストリーを持っている、これまでザグロス地域南西部では発見例がないこと、BV75遺跡の上層ではアケメネス朝期の遺物も発見されていることなどを、手際よく紹介していった。その後筆者が登壇し、この発掘調査の意義と、発掘とは別に行っている渓谷内遺跡踏査の成果などを発表した。特に強調したのは、発掘された文化層が続旧石器時代終末から新石器時代への移行期にあたること、これまでザグロス地域南東部は狩猟採集社会から農耕牧畜社会への変化(新石器化)が起こった舞台の外にあると考えられてきたが、今回の私たちの発見で、少なくとも新石器化の時期に併行する文化層の存在が確実になったことなどである。また踏査の結果、渓谷内のトランスヒューマンズの一端が明らかになったことなども発表した。

午前中のセッションの最後には、イラン＝アメリカ隊の調査成果を、イラン側の共同調査隊長であるテヘラン大学

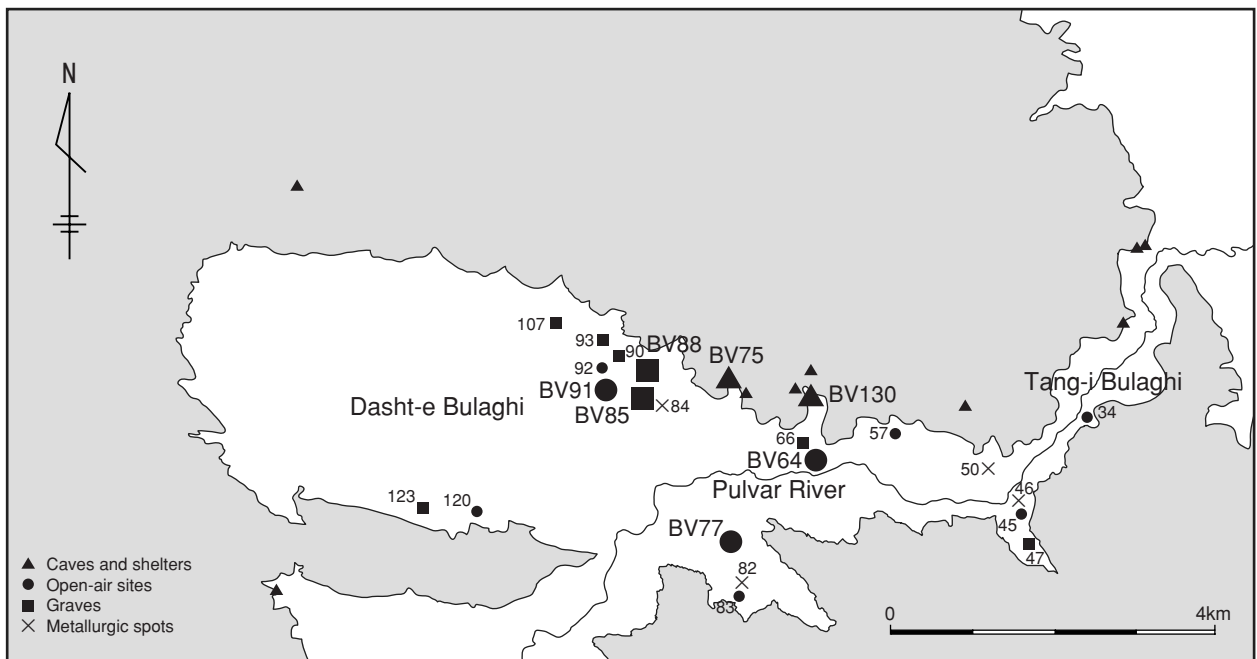


図2 ボラギ渓谷の主な遺跡



図4 いわゆる「王の道」の一部

いる(図4)。大掛かりな石工仕事が必要な目立つ遺構であり、20世紀前半から研究者の注目を集めてきた。ブシャラート氏らは「王の道」の数箇所の断面についてセクション図を作成し、高低をそろえていることや中に堆積している砂質土壌などから、「王の道」が全て灌漑水路であるとの結論に達した。イラン=日本隊の発表においても、踏査成果の中で「王の道」の一部が灌漑水路であったことが表明されているが、私たちは基本的に道路や防御施設として使用されていたと考えており、解釈は大きく異なっている。「王の道」の時期に関しては、石列の上やそれを壊してパルチア期~ササン朝期のストーンサークルが築かれていることから、アケメネス朝期であると考えられており、これについてはシンポジウム参加者の多くが同意している。余談になるが、ブシャラート氏らは翌2006年のボラギ渓谷北東部の調査で、アケメネス朝期の円形柱礎を持った小さな宮殿状建物を発見しており(図5)、ボラギ渓谷を通過する際に王族が使用した別荘ではないかと考えられている。

休憩を挟んで夕方から始まった第3セッションのはじめの発表は、イラン=イタリア隊のアリレザ・アスカリ(Alireza Askari)氏とピエールフランチェスコ・カリエリ(Pierfrancesco Callieri)氏が行った。同調査隊の関心



図5 アケメネス朝期の小宮殿

もアケメネス朝期にあり、同時期の遺物が表採できるボラギ渓谷中央南部のBV76、BV77の2つの遺跡で発掘調査を行っている。BV76の調査では、大きく3つのトレンチを発掘しており、下層ではバクーンA期、上層ではアケメネス朝~ポスト・アケメネス朝期の文化層が明らかにされている。アケメネス朝期の遺構としては住居や中庭が調査されており、比較的良好な石壁の遺構が、大型の甕や青銅製三翼鎌などと共に発見された。BV77では、やはりアケメネス朝期に帰属すると考えられている小さな集落を囲む石壁の周壁などが検出されている。

共同調査隊の最後の発表は、ボラギ渓谷で最初に発掘調査を開始したイラン=ポーランド隊の発掘成果について、ポーランド側の発掘隊長であるバーバラ・カイクム(Barbara Kaim)氏が行った。発掘調査は渓谷北部中央に位置するオープンサイトであるBV64遺跡で行われた。この遺跡は、筆者らが発掘調査を行ったBV130洞窟テラスの下端からシヴァンド川に臨む地点に位置している。11ものトレンチが遺跡の各所に入れられて、パルチア後期からササン朝期にかけての、残りのよい住居の基礎壁や、大きな水槽状遺構、プラスターと小石で作られた床面と水路といった、作業場と目されている遺構群などが検出されている。水槽状遺構の床面からブドウの種子が出土したために、発掘者はこの作業場でグレープジュースを搾って床面に作りつけられた甕に流し込んだものと考えているようである。この調査はポーランド隊としてイランではじめて行う考古学調査であるとのことで、発表でもその点が特に強調されていた。やや気負いすぎという感もあったが、力のこもった発表であった。

23日のシンポジウムは夜遅く終了した。翌24日は早朝よりバスが用意されて、ボラギ渓谷までのエクスカッションが組まれた。各国で調査中の遺跡をめぐりながら、さながら現地説明会の様相となった。

実質2日間の短いシラーズでのシンポジウムであった

が、密度の濃い2日間であったように思える。シンポジウム会場には専門家のほかに大学生ら多数の一般人も聴講に訪れており、なかなかの熱気の中で行われた。言語はペルシア語と英語が用いられ、機器を通じてこの2ヶ国語が常に同時通訳された。シンポジウム会場の外の廊下には、各国隊の調査状況を示す写真と説明がポスターセッションとして紹介されており、各国隊の成果を知る有効な手段となっていた。

そしてシンポジウム全体を通して、ボラギ溪谷の歴史像といったようなものがおぼろげながら浮かんできたように思える。そこは少なくとも旧石器時代終末ごろから人々の生活の舞台となっていて、その後バクーン A 期を中心とした銅石器時代や、アケメネス朝ペルシア時代からバルチア期、ササン朝期、イスラーム期と人々の痕跡が見られる。しかし溪谷内に大規模な集落址が営まれたことはなく、土器焼きやグレープジュース作りの場などのワークショップが残されていたり、交易のルートや遊牧民の移動経路などとして、このボラギ溪谷が盛んに使われてきたことを示しているようである。そのようなやや特殊な生業や移動の舞台であった可能性を念頭において、ダムによる水没前に、正しくボラギ溪谷の歴史資料化をすすめておく必要があるだろう。

最後に、このシンポジウム全体への筆者の感想を述べたい。初日の最後に、ICAR 長官のマスード・アザルヌーシ (Massoud Azarnoush) 氏による簡単な総括はあったが、それぞれの発表やセッションの後に質疑応答は全く行

われなかった。筆者はどこかでまとめて討論の時間があるものと思っていたが、公式にはそのような討論は全くなされず、シンポジウムと銘打っていたので、その点でやや違和感があった。ただし、参加者のほとんどは、ICAR が用意し会場となったシラズホマーホテルに泊り込んでおり、イラン側の共同研究者や他の外国隊のメンバー同士で、食事時やお茶の時間に、時として深夜にまで、ホテル内のさまざまな場所で情報交換や意見交換が自由に繰り広げられたことは印象深い。そのために、シンポジウムで質疑がなかったというフラストレーションは、特に感じずに済んだように思える。イランイスラーム革命以前は、イランではほぼ毎年のように国王主催の考古学シンポジウムが開催されており、イランと外国の調査隊の多くが参加し、そのプロシーディングスも出版されていた。イランイスラーム革命以後では、複数の外国隊を招いて行われた考古学のシンポジウムは、イランにとって今回も含めてまだ2~3度しか経験していない。そうした意味で、アザルヌーシ長官と ICAR の人々の熱意はひしひしと伝わってきたし、ごく短い準備期間にもかかわらず、立派なアブストラクト集も用意され、ポスターも準備され、滞りなく運営されたことに、この場を借りて心から敬意を表したいと思う。これからのこのようなシンポジウムが継続して開かれることを願って、擱筆する。

(本文執筆後に、2007年1月にボラギ溪谷の考古学調査に関わる第2回のシンポジウムが開催されるという案内が飛び込んできた。)

常木 晃  
筑波大学

Akira TSUNEKI  
University of Tsukuba